

新しい大阪産(もん)果実“ミニいちじく”

食の安全研究部 園芸グループ

■技術の概要

従来大阪で栽培されているいちじく「柵井(ますい)ドーフィン」より糖度が高く、味が濃い特徴を持ち、新しい大阪産(もん)果実として期待されるミニいちじく品種「イスキア・ブラック」および「ネグローネ」の生産性向上のため、新しい樹形を開発した。

■技術の特徴

一文字樹形と二段栽培を組み合わせることにより、結果枝密度を高くすることにより、生産性が向上する。

■想定される用途

ミニいちじくは、生果としての利用のほか、和菓子等での加工用としての利用が考えられる。

新しい大阪産(もん)果実として、イチジク生産振興への貢献が期待される。

■技術の内容

- 一文字樹形にすることで、慣行である杯状形と比べて、収量・品質とも向上した。
- 台木にミニいちじく品種を、穂木に柵井ドーフィンを利用した二段栽培を取り入れることにより、同時にミニいちじくと柵井ドーフィンの両品種の生産が可能となる。



写真 品種によるサイズの比較



写真 いちじく大福(イスキア・ブラック)

表 樹形の違いがミニいちじくの収量・品質に及ぼす影響

品種	樹形	平均果重(g)	単位面積当たりの収量(kg/m ²)	果色*	Brix(%)
イスキアブラック	杯状形	33.4	2.2	4.1	19.2
	一文字	41.0	3.4	4.7	19.1
有意性		**	-	**	n.s.
ネグローネ	杯状形	25.9	1.4	4.9	20.3
	一文字	31.5	3.8	4.9	20.1
有意性		**	-	n.s.	n.s.

※果皮色は5段階評価(濃5点～淡1点)「クラスカル=ウォリス検定」

** 分散分析により1%で有意

表 二段栽培での収量調査

品種	結果枝当たりの収穫果数	平均果重(g)	結果枝当たりの収量(g)	果色	Brix(%)
柵井ドーフィン(上段)	9.8	100.6	986.2	4.8	16.5
ネグローネ(下段)	10.6	27.8	294.6	5.0	20.0



写真 一文字樹形の様子



写真 二段栽培の様子

新しい大阪産（もん）果実“ミニいちじく”

○磯部武志・三輪由佳・上森真広（食の安全研究部）

1. 目的

大阪府はいちじくの栽培が盛んで、平成 26 年度の農林水産統計では全国 3 位の収穫量（1,351t）を誇る。現在、本府で生産されるいちじくは、豊産性品種である「柵井（ますい）ドーフィン」が大多数を占める。一方、いちじくの重要病害である株枯病の抵抗性台木として導入を進めてきた「イスキア・ブラック」や「ネグローネ」の果実は、小型であるものの「柵井ドーフィン」に比べ糖度が高く、味が濃厚という特徴を持っている。「イスキア・ブラック」「ネグローネ」の食味は、アンケート調査で高評価を得ており、今後、新しい大阪産（もん）果実として直売所等での販売品目として有望と考えている。しかし、「柵井ドーフィン」に比べ、収量が少ないという弱点があるため、現在のところ栽培に取り組む生産者は少ない。そこで、これらミニいちじくの普及を加速するため、生産性向上効果をもたらす樹形開発に取り組んだ。

2. 方法

(1) 樹形の違いによる結果枝密度、収量及び品質への影響

「イスキア・ブラック」および「ネグローネ」を用い、慣行である杯状形樹形と、生産性の高い一文字樹形による収量、品質の違いを比較調査した。

(2) 生産性向上に向けた二段栽培の試み

「ネグローネ」に「柵井ドーフィン」を接ぎ木した接ぎ木樹を用いた。上段（棚）では「柵井ドーフィン」をブドウの短梢剪定のように左右へ交互に誘引し、下段では「ネグローネ」を一文字樹形にして、両品種の収量、品質調査を行い、二段栽培の可能性を調査した。

3. 結果および考察

(1) 樹形の違いによる結果枝密度、収量及び品質への影響

いずれの品種においても、樹形の違いに関係なく 8 月中下旬からの収穫となった。

「イスキア・ブラック」では一文字樹形で平均果重が大きくなったことと、結果枝密度が高かったため、結果枝当たりの収穫果数は少ないものの単位面積当たりの収量は増加した。果色は良好で、**Brix(%)**に違いは無かった。

「ネグローネ」では一文字樹形で平均果重が大きくなった。また、9 月中旬までの結果枝当たりの収穫果数も多く、結果枝密度も高かったため、単位面積当たりの収量が増加した。果色や **Brix(%)**に差は見られなかった。

(2) 生産性向上に向けた二段栽培の試み

二段栽培を試みたところ、「柵井ドーフィン」では、平均果実重 100.6g、**Brix 16.5%**の果実、「ネグローネ」では、平均果実重 27.8g、**Brix 20.0%**の果実が収穫できた。いずれの品種においても果色への影響は見られなかった。供試した樹は 3 年生樹と若齢であるため、収量性評価は以降も継続して行う。